

三浦豪太

探検学校

宮城の小中学生と共に富士登山

震災後、僕たちはミウラBC支援隊を立ち上げて被災地支援活動を行ってきた。とはいえ、もっとも僕たちらしい応援といえば、「大自然を通じて得た生き抜く力」を伝えることであり、その思いをぜひ、被災地の子供たちと分かち合いたいと考えて先週、宮城県の小中学生と共に富士登山を行った。

僕らが招待したのは松島湾の浦戸諸島にある浦戸第二小学校・浦戸中学校の児童生徒と教員・父兄の計36人で、6月にスキー仲間と炊き出しに行ったのがきっかけだ。松島湾の島々は大地震の津波によってカキのイカダや海苔（のり）を製造する機械が壊滅的に破壊され、地盤沈下も著しく、満潮になると港が海に沈み、道が寸断される。僕は彼らと共に日本一の山、富士山に登りたいと思った。

ご自身も登山家である志小田美弘校長も思いを共有してくれた。こうして小学4年生から中学3年生までの22人、そして牡鹿半島で被災した子供3人と教員・父兄が参加することになった。リーダーは三浦雄一郎と僕。そしてミウラドルフィンズのスタッ



フ、医療関係者や気象予報士や賛同してくれた山の仲間たちがサポートとして参加し、総勢52人。

幸い、素晴らしい天候に恵まれ、三浦雄一郎が先頭に立ち、ゆっくりとしたペースをつくる。

しかし普段海拔0

に住んでいる子供たちにとって標高3000は未知の世界だ。

9合目に着いたころには半数以上が、頭痛を訴え、吐き気をもよおしていた。泣きながら「帰りたい」と言っている子供の姿に、僕が11歳の頃に家族と一緒にキリマンジャロに挑んだ姿が重なった。高山病になりつらくて帰りたいと思った時、家族が励まし、日本にいる友達の応援に支えられて登った。その時に見た朝日は今でも忘れない。

父は今回の登山のテーマを「諦めない一歩、希望の夜明け」と名付けた。その思いを彼らに伝え、励ましながら登っていく。すると子供たちは互いに声を掛け合い、一丸となって山頂を目指し始めた。

頂上に着いたのはちょうど、地平線から太陽が生まれる時だった。まぶしいオレンジ色の光が、涙でぬれた子供たちのほほを照らす。その瞬間、彼らの顔が生き生きと輝き、感動の涙へと変わった。全員登頂。2011年は震災というつらい思い出だけではない。初めて富士山を登ることができたという誇りを、みんなの胸のなかに刻んでほしい。

希望の夜明け

一部記事の敬称を省略しています。

新 あらたにす
<http://allatany.jp>